

## 担任一人で対応したため「いじめ」の指導に失敗した事例

キーワード： いじめとは何か

校内サポートチーム

保護者への説明責任

この事例解説では、担任が一人で解決可能と判断して対応しながら、解決が難しくなった経過に焦点をあてました。

### 問題の概要

転任早々、6年生を担当することになった。前担任からは、学力は高いが、まとまりのないクラスであると引継を受けた。その中で、Fは、4月当初から学級内で孤立する傾向があり、気に掛かる児童であった。班活動やグループの活動でも一人でいることが多かったので、Fにたずねると「一人で活動したい」「自分のやりたいようにやりたい」という返事が返ってきた。周りの子にたずねると、「Fはいつも一人でいるから」と話した。

保護者面談の際にFが孤立していることを話すと、母親は「Fはそういう子ですから」と言うので、それ以上は話題にならなかった。そこでFはそういう性格の子なのであればしばらく様子を見ていこうと考え、学年長に相談したり校内で話題にしたりすることもしなかった。

そのような状況のまま3学期を迎えたある日、Fの母親からいじめの訴えの電話が入った。学級内の男子から無視されたり、悪口を言われたりしている。その中心がEという子であるから、その保護者と話し合いたいという内容であった。

### 対応の概要と実践のポイント

担任はFの保護者とEの保護者が話し合えば解決すると考え、Eに話を聞くと事実を認めたのでEの母親にそのことを伝え、話し合いをお願いした。すると、Eの父親から、「いじめているのはEだけではないのだから、学級全体の指導が必要ではないか」「Eだけでなく学級の他の子どもの指導もしてほしい」という訴えを受けた。そこで、担任が、学級の男子に話を聞くと、無視したり、仲間はずれにしたりしていることを認めた。担任は、集団で一人をいじめることはよくないことを話し、やめるように話した。

すると、学級内の保護者から、「一方的に悪者にされるのは納得がいかない」「低学年の時には、逆にFからいじめられていた」「Fにも悪いとこ

ろがあるとうちの子が言っている」等の訴えが多数寄せられた。また、担任の指導に不信感をもった保護者から、学級懇談会を開いて説明を求める意見も出された。

学級内の子どもたちも、担任の指導に対する不満が高まり、雰囲気どんどん悪くなっていった。

一人で対応することに限界を感じた担任は、学校長、教頭、生徒指導主事に相談し、学校体制での対応をお願いした。

### 失敗の原因

#### ② 担任一人での指導

いじめの指導は、「いじめられている子ども」と「いじめている子ども」が存在する。そこで、担任一人で対応すると、どうしても「いじめられている子ども」の立場にたった指導になってしまう。いじめは決して許されることではないが、「いじめている子ども」にも、その理由や思いがあるから、その点に寄り添いながら指導を行っていく必要がある。そこで、担任一人で抱え込まず、学年や校内でチームによる指導援助の体制をつくり、役割分担を決めて、関係する子ども一人一人の心に寄り添いながら話を聞き、解決の方向を探っていく必要がある。

#### ② 保護者への説明不足

いじめは、当事者だけでなく、積極的にかかわっている子ども、いじめの事実を知っているが傍観している子どもなど、学級全体の子どもにかかわる問題であることが多い。その場合には、一部の保護者だけでなく、学級内のすべての保護者の理解と協力を得られる必要がある。

この事例では、子どもたちの話を聞きどのような事実が確認されたのか、それを受けてどのような指導を行っていくのか、その結果がどうなっているか等、正しい情報を保護者にも説明する責任があった。保護者への説明責任がきちんとなされていれば、保護者から十分な理解と協力が得られるたのではないだろうか。